



大阪公立大学附属植物園

友の会だより

第 66 号 (2026年3月20日)

発行 植物園友の会

会長 児玉 隆夫



地味な花や実を持つ植物

エッと読み直すテーマで、こんなのが植物園友の会にふさわしい話題なのか??と驚かれるとは思うのだけど、このような生き方をして、なおかつ生き残っていることに自然の懐の深さを感じていただきたく思うので。それに、「地味」という見方は人間の意見で、植物にとっては、あるいは生活の糧にしている、いわゆる害虫にとってはものすごく魅力的で、生涯付き合っていく覚悟で生きているはずだし。人の目(私の目)で地味に感じるだけかもしれないし、というくらい、いい加減なタイトルを付けて、いろんな「地味な」植物を見ていこうと思う。

フサザクラ (フサザクラ科) 落葉樹見本園の一番奥 (池の手前) に何株か展示植栽されている。サクラ (バラ科) とは全然違うグループだが、春早くに咲く植物の一つ (3月中~下旬)。右の写真はいずれも同じ株で3月中旬撮影。花序によって開花のタイミングがずれていたものを選んで、花序の成熟度によって上から下へ並べた。

上1段目: オシベ (濃い紅色; 一見2本のウィンナーが寄り添っているような形をしている) が房になって出ている。花粉を出す直前でパンパンに脹れている。おしべの付け根からかすかにメシベ (うす緑色) が顔をのぞかせている。

2段目: オシベは花粉を出し終わって、しおれて黒くなっている。メシベがやや大きくなってきた。

3段目: オシベはほぼ脱落してしまっている。メシベは成熟して柱頭が白く、パフ状になっている。



気まぐれ、とお思いでしょうが、この表題のような植物たちもしっかりと生きているので、なぜ生き続けられるのかな、どうやって子孫を残しているのかな？ 生物って色々あるな!？と生命の多様さの一面とあっていただきたく、紹介します。

フサザクラの仲間は世界中に何種あるのだろう、と思って調べたらフサザクラ科に1属2種があるだけだった。世界中でアジアだけ、それも中国、アッサム地方、日本と非常に限られている；中国とアッサム地方には日本とは別の種が分布している；これらの例を見ると日本という地域では、なぜこんな植物たちが生き残っているのだろうか、どこから来たの？と問いかけたくなる。中国大陸からに決まっているのだけど；でも、なぜ遠く離れた日本にあって、近い朝鮮半島にはないのだろうか？

タチモは名前から分かるように水草で、多分、2種が知られているだけだ。別の1種が中国に分布しているとのこと。名前の由来は「立つ藻（タツモ→タチモ）」で、「立っている」という特徴を持つ藻（藻という言葉は水草に使われる）という命名だろう。当然のことだが、水草は水（川や池など）に直接触れて生活しているという特徴を示す植物を指す。従って、ごく最近あまりなくなってきたが、水という環境が様々に汚染されていた一昔前には、どんどん姿を消していった、大問題になっていた（絶滅危惧種に



タチモ（アリノトウグサ科）6月。物差しがないのでわかりにくいですが、花はごく小さい（草丈は5-20cm；水面上にまで出るとのびのびと生長するような）。茎から出ている葉の長さは2センチほどしかない。



右中と下：ハンゲショウ（ドクダミ科）6月

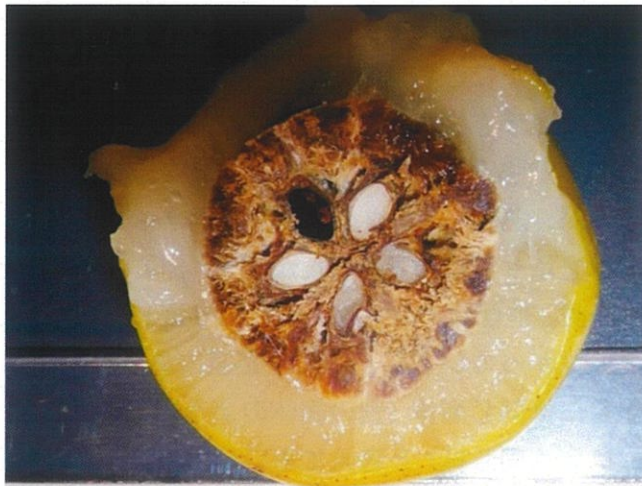
中：遠くから見て、茎の先端近くにある大きな白いものは葉緑体のない葉で、花はその上、茎の先端に尻尾状の花序があり（下の写真）、そこに沢山の小さなつぼみがあるが、その1つ1つが花。すごく小さくて、おしべとめしべしかない。花そのものはかなり地味。葉緑体のない葉が花卉の代役を果たしている。ドクダミの仲間の実験材料として扱ったことがあるが、初めて見た時（奄美大島で自生）は花を見なかった。

指定されていたものが多かった)。幸い、多くのいろいろな人たちの大変なご努力で、少しずつ水や大気などの生きるために特に大切なものなどが改善されていったようで、少しずつ自然の中でも見かけられるようになってきているようだ。ハンゲショウは漢字では「半夏生」と表示する。ドクダミの仲間だが、属は違う；ドクダミはドクダミ属、ハンゲショウはハンゲショウ属で、そして、どちらもドクダミ科だ。

今回紹介している植物たちは、生育環境がかなり限られていて、分布域も非常にまれな場合がある。右に紹介しているチャンチンモドキは、なんと、日本ではごく限られたところにだけ自生し、その株数もごく限られている（環境省レッドリストでは絶滅危惧 IB 類 (EN) に指定されている（インターネットのウィキペディアのフリー百科事典でチャンチンモドキの項を見ると、中ほど右側下に幹の写真が載っているのだが、その左側の奥に他の植物の幹に植物の情報を記載した標識がかすかに映っているのだが、どうも公立大学の植物園の中の株のように見える、さらにこの写真の説明文の最後に「大阪府」と植樹場所が記載されているし）。



メタセコイア：秋も深まり、メタセコイアの一面の紅葉の中に、枝の先端にできた雄花群のつぼみ。来春の開花まで何か月も、何かを準備中？（雌花は成木の先端部の枝に出来るらしく、普通では見られない；花に関するエピソードは 58 号で紹介しているが、友人がごく近くで写真撮影に成功したのは高層マンションの上階に自宅があったためだった）



チャンチンモドキ（ウルシ科）

上：オスの株。枝のあちこちにみられる黒っぽい塊（本当は深い紫色？；植物は黒い色素（メラニン）を持たない）は雄花が集まった花序。入口すぐの芝生広場の川沿いに植栽（樹高 20 メートルくらいの高木）。

下の組み写真：チャンチンモドキの核果（株は 20 メートルを超す高木；研究棟の裏）。厚い果肉に包まれたコルク質の実は 5 室あり、中に種子が 1 つずつ入っている。ウメやモモのタネ（種子は 1 つ）と基本的に同じ構造。

タケ・ササ類 (右上)

タケ、ササの花はめったに見ることができない。開花は日本中で大事件並みのニュースとして報道されるほどだ。手元にある植物の写真集の1つ、山溪カラー名鑑「日本の樹木」(山と溪谷社)で調べて見たら2種(チマキザサとスズタケ)で花序を付けている写真が載っていた。

私は若いころ、滋賀県だったかの高原で高さ1-2メートルくらいの、一面ササの草原(?)で、全植生が開花中であつたのに出くわしたことがあつた。しかし、若い頃は竹笹の開花ということが大事件だということを十分に理解していなかったこともあり、写真は撮っていなかった(カメラを携行していなかったかも)。残念ながら勉強不足であつた。ご存じの方もあつたと思うが、念のため。タケ、ササは通常は地下茎で株を増やしていく。したがって、出ている稈は一見、他個体のように、根を掘り返してみるとつながっていることはごく普通にあり、この場合には同じ個体(別の個体のように、遺伝的には全く同じ株)と考えてもいいだろう。しかし、地下で何かの拍子に切れてしまうことも起こり得るが、この場合にはどうするのか、私にはよくわからない。

ここに紹介しているタケ・ササは植物園内のコレクションから、特徴のある個性的な株を選んでみたもので、やや、野次馬的選び方。

ボヤキ!? 今回は地味な材料ばかりを扱い、なかなか筆も進まなかつた。いつも、どう表現していいか悩むこともあるのだが、特に今回は材料選びから始まって、何か特徴とか話題になることとかを探すがまず大変だつた(“地味”とはそういうこと)。ブツブツ。いつもは厳しい自然の中で生き残ってきている生き物たちはそれなりに斬新な、驚かされるような素晴らしさを見せてくれるのだが、今回は勉強不足の未熟者であることを改めて自覚してしまつた。



ウラシマソウか?(サトイモ科:かなり同定がむづかしいグループがある)4月. 肉穂花序の先端が細長く伸びる(赤い縁の白矢印)。種名はこの肉穂花序の特徴から、細く長く伸びている→釣り竿の糸→浦島太郎に行きついたようだ。昔の分類学の先生は貧乏だつたけれど優雅であつたようだ。

岡田 博

新年あけましておめでとうございます。

植物園友の会の皆さまにおかれましては、旧年中、大阪公立大学附属植物園の活動に対し温かいご支援とご協力を賜り、心より御礼申し上げます。

本園は1950年の開設以来、植物学の研究拠点として植物の収集・保存を進めるとともに、教育・社会貢献にも取り組んで参りました。日本各地の森林を再現した樹林展示や、絶滅危惧植物の保全・増殖は、研究機関や地域との連携のもと発展を続けています。これらは、未来へ自然を引き継ぐ植物園の重要な使命です。



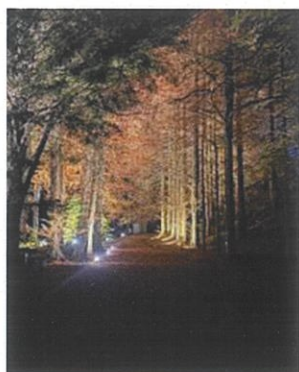
《名波 哲 園長》

一方で、植物園は研究施設にとどまらず、市民の皆さまにとって憩いの場であり、四季折々の花々や樹々を通じた自然との触れ合いの場でもあります。春には桜の優しい色彩、夏には生き生きとした緑、秋にはカエデやイチョウの紅葉、そして冬には冬芽の静かな美しさと、訪れるたびに新しい発見と感動をもたらしてくれます。こうした四季の移ろいを感じられる環境は、日々の生活に安らぎを与え、自然の営みの尊さを改めて気づかせてくれるものです。

植物園友の会の皆さまには、2008年の発足以来、植物園の活動に賛同し、支援の輪を広げていただいております。昨年も藍染体験やリース作りのイベントの開催、メタセコイア夜間ライトアップでの園内警備などのご協力を賜りました。また「友の会だより」は、植物に対する関心を深める情報発信誌です。植物園にとって友の会は、園の理念と活動を共に育んできた大切な仲間です。その存在こそが、植物園の活力であり、地域と研究・教育を結びつける力となっています。

2026年は、「つながりをもって植物と人を育てる植物園」を目指します。園内の植物資源を活かした教育プログラムの展開や、多様な生物の相互作用に関する研究の促進、そして地域の皆さまとの連携活動を強化してまいります。また、友の会との共同企画・交流機会をさらに拡充し、ともに自然の魅力を伝え、学ぶ場づくりを進めていく所存です。

結びに、今年も皆さまの変わらぬご支援と、植物園を通じた新たな出会いと学びが多く生まれますことを心より願っております。どうぞ本年も、植物園の活動にご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます、園長としての新年のご挨拶といたします。



メタセコイア 夜間ライトアップ（12月6日）

2026（令和8）年 新春
大阪公立大学附属植物園 園長
名波 哲

友の会イベント

～ Summer & Winter ～



大人気の恒例イベント！
今年も盛大に開催されました。
夏と冬では植物の肌触りが全然違います。
水分たっぷりの藍葉からは元気いっぱい
エネルギーをもらえます。反対に乾燥気味
のリース材は心をしずめて穏やかな安ら
ぎを与えてくれます。
大自然の力はやっぱりすごいですね！



S u m m e r 2025. 8. 9 藍 染 め



ご参加ありがとうございました！



藍葉液が大成功！



(6月)
ファームで育つ藍



色が濃くしっかり染まりました！



オリジナルの柄づくり



かわいいうしろ姿♡



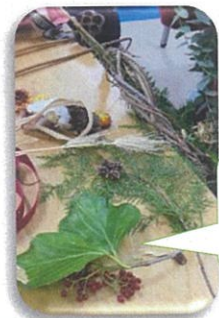
ご協力いただいたリース材料



W i n t e r 2025. 12. 7 リースづくり



思い思いのリースづくり



生葉の
良い香



できあがり♡

友の会の日常 ～ 会員の皆様とボランティア作業 ～

毎年、総会のお知らせと一緒に「作業ボランティア」の希望を伺っております。

ご希望の会員様にご連絡させていただき、月1回から2回程度、友の会ファームの作業を一年間行ってきました。夏の除草作業やファーム全体の水やり、そして次の季節に向けての準備など大変な作業も多くありますが、皆様の笑顔や笑い声がファーム全体を明るく包む楽しい居場所となっています！



今年も丸々した
田辺大根ができました!!

作業ボランティアのお誘い
私たちと一緒に大自然に囲まれながら
楽しい時間を過ごしませんか？



(7月)
伸びまくる植物達の
整理が主な作業



20分ごとの休憩も
いつも楽しい!



(11月)
過ごしやすい季節を
感じながらリース材収集



大自然の中で夢中になっ
て木の実拾い



フレッシュハーブティーを
いただきました



(1月)
10年越しの腐葉土を
掘り起こして春支度♡

友の会総会のご案内

開催日時：2026年4月18日土曜日
14：00～15：00

会 場：植物園 実習室

* 総会后、懇親会を行います（会費 1,000 円）
会員の皆さま ぜひご参加ください

* 総会と懇親会への出欠を同封のハガキにて返信をお願いいたします。なお、恐れ入りますが 85 円切手をお貼りください（4月10日必着）

友の会継続のお願い

2026年度も引き続き植物園へのご支援、友の会への継続加入をよろしくお願い申し上げます。

希望者に年間パスポートを発行します。友の会行事、なにわ伝統野菜やハーブ栽培のボランティア、クリスマスリース作りにもご参加ください。

* 植物園窓口または同封の振込用紙にて4月10日までにお手続き頂けますとありがたいです（郵便振込は費用軽減のため通帳又はカードからATM機をご利用ください）

植物園の四季

①



②



③



④



⑤



⑥



- ①ウメ
- ②八重桜
- ③菖蒲
- ④彼岸花(玄関沿道)
- ⑤ベルガモット
(友の会ファーム)
- ⑥カエデ

ご意見、ご質問、ご要望等がございましたら、右記までご連絡ください

〒576-0004 交野市私市 2000
大阪公立大学附属植物園 気付
友の会 友の会だより編集部
kisaichishokubutuentomo.2008@gmail.com